
アマガミとキミキスの話

バンダナ・ピカチュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマガミとキミキスの話

【Nコード】

N5422U

【作者名】

バンダナ・ピカチュン

【あらすじ】

タイトルのままです。PC用に改良した物はピカチュンの小説集
修正版（PC用）に投稿しています。

ピカチュンとタマタマのちょっと雑談（作者は忙しいので内容は短め）（前書き）

まだまだ就職できそうに
ありません……

ピカチュンとタマタマのちょっと雑談（作者は忙しいので内容は短め）

ピカチュン

「ついにタマタマも
小説を書き始めたんだ。
どんな内容のやつ？」

タマタマ

「ああ、夢小説って奴で
今はアマガミの話を
書いてるんだよ。
内容はこんな感じだ。」

（……………）

ピカチュン

「なんか僕出てるし……
しかも最初から
飛ばし過ぎだよ！
まず最初は適当に書いて
様子を見つけないと……」

タマタマ

「いいんだよ！」

様子なんか見ないで
最初から全力で挑むのが
男ってもんだろ！」

ポツチャマ

「何に挑むんだよ……」

タマタマ

「規制って奴にだよ！」

ポツチャマ

「……………」

今日はリアルの世界で
こんな話を話しました。

僕も早く就職して
のんびりと小説書きたい
です……

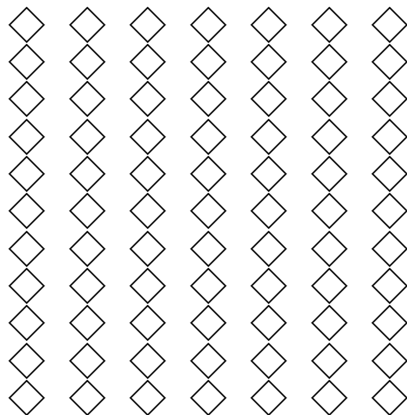
ピカチュンとタマタマのちょっと雑談（作者は忙しいので内容は短め）（後書き）

就職活動で忙しい僕に
変わってタマタマが
僕の紛失してしまった
第51話を書いて
くれる事になりました。

楽しみにして下さい。

残念ながらタマタマの
書くR18内容は
全て編集してしまうので
あしからず。

0 周目 (第1話～52話) はどこに移動したか？



0 周目こと

第1話～52話は

あまりにも

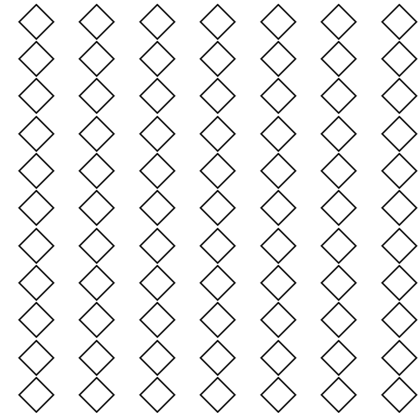
駄作だったため

● 別小説

白銀編・前置き&ボツ小説保管庫

に保存しています。

面白くない話なので
隔離しました。



ちなみに◇は
最低文字数を
稼ぐために書きました。

何故途中放棄したか？

皆さんお久しぶりです。

まだ就職活動中の
バンダナ・ピカチュン
です。

今まではF-105を
何週も繰り返して
シリーズ化を図ろうと
していたのですが
今の私には長い物語を
考える時間はないので
これからは
思いついた短編集を
書いていこうと
思います。

ちなみに第69話まで
書いた話は全て
白銀編前置きに
保存しました。

この小説では
アマガミ・キミキスの
短い話を中心に書いて
いきたいと思います。

今まで通算4回以上も
途中放棄している
しょうもない作者ですが
これからも
よろしく

お願いしますm ((m

第1話：★★☆☆☆◇●橘純一×中多紗江●、ベストカップルコンテスト（前編）

オススメ度2の話です。

第1話：★★☆☆☆◇●橘純一×中多紗江●、ベストカップルコンテスト

●バス停

橘純一

「今日の遊園地
楽しかったね。」

中多紗江

「は、はい……」

橘純一

「……………」

紗江ちゃん、
どうしたんだろう？

今日はなんだか
いつもよりも

緊張してる
みたいけど……

中多紗江

「せ、先輩……
来週は創設祭ですね。」

橘純一

「ああ、うん。
そうだね。」

中多紗江

「そ、その……」

橘純一

「？」

中多紗江

「な、なんでも

ないです……」

橘純一

「……………」

紗江ちゃん、いったい
何が言いたかったん
だろう……

選択肢

↓●聞いてみる

●聞かないでおく

橘純一

「紗江ちゃん。
遠慮しなくていいよ。
僕に何か聞きたい事が
あるんだよね？」

中多紗江

「あ、はい……その……
先輩……私と……」

そう言っている間に
バスが来てしまった。

中多紗江

「私と……
ベストカップル
コンテストに出て
貰えませんか？」

橘純一

「僕と!？」

中多紗江

「駄目……ですか？」

橘純一

「駄目な訳ないよ！
紗江ちゃんと一緒に
ベストカップル
コンテストに
出られるなんて
嬉しいよ！」

中多紗江

「良かった……」

橘純一

「あ、紗江ちゃん
早くバスに
乗らないと……」

中多紗江

「あ、はい！」

こうして僕達は
ベストカップル
コンテストに

出る事になった。

僕が紗江ちゃんと
カップル……

観客達のブーイングが
止まらないかもな……

あんな可愛い子が
僕みたいな
駄目な男と……

???

「それは違うぞ橘。」

橘純一

「え……」 柊明良

「君は駄目な

男なんかじゃないさ。」

橘純一

「あ、柊……」

柊明良

「確かに君は
勉強はできないし運動も
ずば抜けて優秀で
ある訳でもない。」

橘純一

「確かにそうだよ……
だから僕なんて……」

柊明良

「でも君には誰にも
負けない事が
あるだろ？」

橘純一

「そんな事なんて
何もないよ……」

柊明良

「いや、あるさ。
君は他の誰よりも
中多さんを
愛しているじゃないか」

橘純一

「ははっ……僕には
それしか
できないからね……」

柊明良

「それで充分じゃないか
中多さんも自分には
それしかないと
思っている。
君の事が
好きな気持ちしか
他の女の子には
勝てない。」

橘純一

「そ、そんな事ないよ！

紗江ちゃんは

とても一途で純粋で

優しくて……」

柊明良

「そう言う事さ。」

橘純一

「え……」

柊明良

「中多さんも

同じ事を言われたら

君のいい所を

いくつでも言うだろう。

つまり、自信がないのは

お互い様って事さ。」

橘純一

「で、でも周りの人は
釣り合っていないって
言うて……」

柊明良

「でも、中多さんが
好きな人は君だけさ。
誰がなんと言おうとも
中多さんは
君と一緒に居たいと
思っている。
その気持ちに
変わりはない。
中多さんは
ベストカップル
コンテストで着る服を
君の分まで作っている。
それがその証拠さ。」

橘純一

「そうか、紗江ちゃんは
僕の……って
どうして柊がそんな事
知って……」

柊明良

「……………頑張れよ。」

橘純一

「あ、柊！」

柊は逃げてしまった。

橘純一

「あいつ、もしかして
ストーカーなのか……」
●コンテスト控え室

今日は創設祭。

絢辻さんの
挨拶が終わって
次はついに

ベストカップル
コンテストだ。

橘美也

「紗江ちゃん
綺麗なドレスだね。」

中多紗江

「う、うん。
お母さんが
オーダーしてくれたの」

あれ？

柊は確か紗江ちゃんが
服を作ったって
言ってたよな……

もしかして紗江ちゃん
僕に気を使って……

橘美也

「にいいにも
似合ってるよ。」

橘純一

「そ、そうか……」

橘美也

「はぁ……にいに
ガチガチだね……」

橘純一

「う、うるさいな……」

梅原正吉

「まあ、気楽に行こうぜ
大将。」

橘純一

「ああ、そうだな。
ところで梅原
その魚はいいたい
何なんだ？」

梅原正吉

「トロ子だ。」

橘純一

「そうか。
それで何に使うんだ？」

梅原正吉

「もちろん
ベストカップル
コンテストに出るのに
決まってるじゃないか！」

橘純一

「マ、マジか……」

梅原正吉

「大将達には悪いが
今回は俺の勝ちだな。
確かに中多さんと
トロ子はいい勝負だが
俺と大将で
差があるからな。」

橘純一

「そうか……」

魚と一緒に
ベストカップル
コンテストに
参加するとは……

梅原、お前最高だよ……

実行委員

「最初は橘純一君と
中多紗江さんです。
準備して下さい。」

橘純一

「はい！紗江ちゃん
行こうか。」

中多紗江

「せ、先輩、
緊張しちゃって
足が動かないです……」

僕は紗江ちゃんの
手を握ってあげた。

中多紗江

「あ……」

橘純一

「僕がついてるから
大丈夫だよ。」

中多紗江

「先輩……」

橘純一

「それじゃあ行こうか」

中多紗江

「はい……」 ●会場

絢辻詞（白）

「皆さん、
お待たせしました。
次はベストカップル
コンテストです。」

観客

(ワー!!!)

絢辻詞(白)

「最初のカップルは
橘純一さんと
中多紗江さんです。」

橘純一

(行こう、紗江ちゃん)

中多紗江

(は、はい!)

僕達はステージに
上がった。

観客

「うおおおおお！！！！」

観客

「綺麗だつてばよ……」

観客

「なんで中多さんが
あんな奴なんか……」

観客

「リア充爆発しろ！」

七咲逢

「今日の紗江ちゃん
なんだか
大人っぽいね。」

橘美也

「うん、綺麗だよー」

絢辻詞（白）

「これはなんと
初々しいカップル
なのでしょうが、
まるで結婚式の
ようです！」

観客

「やったなー橘！」

観客

「中多さん！
お幸せに！」

観客

「チクショー！
末永く爆発しやがれ！」

みんな僕達を
祝ってくれてる……

絢辻詞（白）

「では橘純一さん、
あなたは中多紗江さんの
どこか好きですか？」

橘純一

「はい、とても優しくて
一途で純粹で……
大人しいけど
何事にも一生懸命で、
とても可愛い所と、
む………ゴホッ！
こんな僕を
愛してくれている
所です！」

中多紗江

「先輩……」

危ない危ない……

こんな所で
胸が好きなんて言ったら
変態だと
思われてしまう……

絢辻詞（白）

「なるほど、
中多紗江さんは彼の
どこが好きですか？」 中多紗江

「あ、はい！
とても優しくて
頼りになる所です！」

絢辻詞（白）

「ありがとうございます。
お二人はいつ頃
出会ったんですか？」

橘純一

「11月の終わりに
僕が食堂で
財布を落とした時に
彼女が拾って
くれたんです。
それから話すようになり
仲良くなりました。」

絢辻詞（白）

「と言う事は
まだ付き合ってから
それほど経って
いないんですね。」

橘純一

「はい。
本格的に付き合うように
なったのは
3週間前です。」

絢辻詞（白）

「どちらから
告白したんですか？」

橘純一

「彼女です。

初めはびっくりしました

こんなに可愛い子が

僕に告白してくれる

なんて……」

絢辻詞（白）

「中多紗江さん。

告白しようと

思った理由は

何かありますか？」

中多紗江

「そ、それは……

わ、私の中で

橘先輩の存在が

どんどん大きくなって…

いつの間にか好きに

なってたんです。」

紗江ちゃん……

絢辻詞（白）

「なるほど。

橘純一さん

中多紗江さん

ありがとう

ございました。」

観客

（パチパチパチパチ）

こうして、

僕と紗江ちゃんは

ベストカップル

コンテストに

参加した。

みんな僕達を

祝福してくれた。

まあ、優勝は
蒼鬼と二見さん
ペアになったけど
ベストカップル
コンテストに参加して
良かったな……中多紗江

「先輩、ごめんなさい、
私のせいで
優勝できなくて……」

橘純一

「いや、紗江ちゃんの
せいじゃないよ。
それに僕達
40組の中で
2番目だったんだから
いい方だと思うよ。」

中多紗江

「そ、そうですね。
準優勝でも
すごいですよね。」

橘純一

「うん、そうだよ。

それに今年が駄目でも
また来年があるよ。

僕達はまだまだ

これから

いろんな事をして

仲良くなっていくんのだ。

だからこれからも

一緒に居ようね

紗江ちゃん。」

中多紗江

「はい！」

とても一途で可愛くて

大人しいけど

告白する時は

しっかりしていて……

一生懸命な所に

僕は惹かれたんだな。

僕も彼女と

釣り合えるような
男になれるように
頑張らないとな。

よし、頑張るぞ！

第1話：★★★★☆◇●橘純一×中多紗江●、ベストカップルコンテスト（後

リアル事情に

頭を支配させられて

妄想力が弱まっている

作者です……

皆さんに★★★★★の

オススメできる話を

提供できるのは

まだ先の話に

なりそうです……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5422u/>

アマガミとキミキスの話

2011年10月14日22時57分発行